第2回 豊岡市生物多様性地域戦略 第3期短期戦略策定委員会 議事録

日 時：2022年10月13日（木）9：30～11：40

場 所：豊岡市稽古堂 3階 交流室3-1

出席委員：菊地直樹委員、出口智広委員、菅村定昌委員、田中陽介委員、永瀬倅大委員、
西垣由佳子委員、森本莉永委員、高橋佳大委員、藤田楓加委員

事務局：豊岡市コウノトリ共生部 川端部長

農林水産課 柳沢課長

コウノトリ共生課 宮下課長、宮田参事、兵藤係長

受託事業者 復建調査設計(株) 梅本、杉山

開 会：委員長あいさつ

《以下 →：委員発言、⇒事務局発言》

◎報告

(1) 豊岡市生物多様性地域戦略第2期短期戦略の取組実施状況

⇒参考資料1に基づき事務局より説明

(意見及び質疑等)

→特になし。

(2) 豊岡市生物多様性地域戦略第3期短期戦略の取組案及び目標設定の考え方

⇒資料1に基づき事務局より説明

(意見及び質疑等)

【作戦1について】

《目標2-①》

→登録制度、どういう基準で誰を選ぶのか。検定を受けた人が登録するのか、それとも生きものに詳しい人を一本釣りするのか、登録制度の信頼性にも関わるところになると思うが、それについて考えがあれば。

⇒生きもの博士に期待することとして、地域で活動する生きもの調査とか、地図作りに活躍していただきたいと考えている。生きもの全般に対応できる方はないと思うので、いろんな方に私はこういったことが出来ると登録していただきながら、講師派遣のニーズに対応していくというイメージを持っているが、具体的にどのレベルで登録していくのかは、これから検討していけたらいいと思う。

→これから検討ということで了解。

《目標2-②③》

→「生きもの博士の育成について継続的な学習の場を設ける」と何れもなっている。一つに出来ないか？

⇒②については大人の学び直しや、関心がある方がさらに学びたいというニーズへの対応を想定。③については、小学生を対象に実施しているコウノトリ KIDS を想定。統合できるかどうかを含め検討したい。

→説明を聞けば分かったので、説明があったようなことも書き込んでおいた方が良いでしょう。

→コウノトリ KIDS とは別に、中学生のコウノトリ KIDS+（プラス）があると思うが、そこはどうか。

⇒中学生の KIDS+も含め③で考えている。その後の高校生や大学生について④での支援とつなげていきたいと考えている。

→小学生から継続した支援が出来る、というニュアンスで間違いないか。

⇒出来るというか、していきたい。

《目標 3-①》

→絶滅危惧種については、市や県などでも情報を把握していると思う。それらを一元的に GIS を使って、どこに何がいるのか分かるようにした方が良いでしょう。

⇒GIS による整理か、生き物観察アプリ等の活用による整理かは別として、何らかの形で集約し、必要な情報提供ができる方策について検討したい。

→生きもの観察アプリを利用した場合でも、全国版レッドリスト掲載種については公に見られるようにはならないとも聞いている。市民が参加しやすいアプリ等の活用による、生きものの見える化は進めていけばよいと思う。

⇒生きもの観察アプリの機能を十分認識していないことや、GIS で情報集約する場合でも、GIS の精度などの問題もあると思う。効率的であり、一方、希少種などの情報は公開されない方法について検討する必要がある。

→情報の集め方や管理の仕方等次回に示すこと。

《数値目標設定について》

→目標 2 は数値目標が立てやすそう。登録制度は何年間で何人登録しましょうとか、生きもの博士何人ぐらい育成しましょうとか、あるいは研究活動支援を何件くらいするとか。具体的に議論すると時間的にも収集つかなくなると思うので、次回提案していただきたい。

【作戦 2 について】

《目標 1-④》

→ネイチャーポジティブについては、どういうニュアンスで使われているのか。個人的なイメージでは、ネイチャーポジティブというのは経済とかビジネスと絡めたロジックで使われるのかと思うが。

⇒ビオトープネイチャーポジティブはいろんなところで使われるのかと考えている。

現在、生物の多様性が減少の一途をたどっている。その中で、世界的にも 2030 年までに自然の減少を上昇傾向に持っていこうという形で国際会議等でも提唱されている。

その実現のためには、市民一人一人が行動を変えていく必要がある、ということがあり、市民の方の行動が変わっていく何らかのインセンティブ等を考えていく事が必要なのではないかと思う。

地球温暖化という部分については、多くの方が自分事としてイメージがあると思うが、生物多様性は生物が減ったからといって自分の身の周りに何が起こるのか分かりにくい。なかなかイメージしにくいと言われる。それでもやはり生物多様性の減少を止めていかないと、地球温暖化も含めて、これからの地球環境がおかしくなっていくと言われているので、そういったものも含めてのネイチャーポジティブという形で、広く捉えていただき、行動変容へつなげていくと考えていただければ。

⇒今回の戦略は、広く一般の方にも見ていただくものであり、いろんな意味の捉え方や分かりにくいということであれば、ネイチャーポジティブのキーワード以外も含めて改めて全体的に見てもっと分かりやすい、伝わりやすい表現にするように見直しを検討したい。

→そういうことであれば、30by30 に変えたほうが分かりやすいのかもしれない。

30 年までにと年限が区切っているし、30 パーセントと非常に分かりやすい。

また、30by30 って何のことなのって疑問に思ってもらって説明した方が、より具体的に生きものに対しては訴えられるので、30by30 がふさわしいと思う。

全体を通して、今、日本に徹底的に欠けているのが湿地と水辺の再生とっている。そういうことが分かるような書き方だとか、草原も決定的にないし、大きな環境の部分をなんとかしましようという視点はないわけだから、そういうことに少くく触れてもらえたらありがたい気がする。

→30by30 とか、湿地や水辺、環境的な要素、具体的なそういうところをもう少し入れ込んでもいいのではないかということでした。検討しましょう。

また、読んでいて、「ん？」と引っかかる言葉が出てくるのはあまり良くないと感じる。ネイチャーポジティブってなんだろう、OECM。いきなり出てくるけどなんだか分からないなと思う。

市民が計画を読んで、自分事として考えるということであれば、あまりキャッチーな言葉、市民になじみのない言葉は使わない方が良いと思う。

《目標 2-①》

→豊岡市内に多分 50 か所くらいビオトープがあり、そのうちの 24 か所を大学院生のお手伝いで見て回っているが、びっくりするような植物が出てくる。すごいと思う。

その周りを見ると、みんな休耕田、完全に耕作放棄で無茶苦茶になっている。みんなビオトープにして欲しいなと思いながら回っています。

ビオトープで、出て来て欲しいと思っていた植物があるが、ビオトープの水深が深過ぎて出てこなかった。ビオトープの水管理を失敗して一部が乾いてしまったようなところに出てくる植物だが、市内全体を見てそのタイプの植物が激減している。正味の話としてはビオトープをもっともっと増やしましようという話しと、もうちょっと多様な管理をしましようというようなことがあると、多様な生きものが住みやすい環

境が増えるのではないかと思う。

《目標 2-②》

→ここ最近コウノトリがケガをしたり、ネットに絡まったりだとかという事例が多くなってきている。なので、見守って、そういった状況が発生した場合の対応だとか、市民はどうしたらいいとかいうこともここに明記してもいいと思う。

⇒対応ということである。天然記念物なのでしっかり見守っていく必要もある。一方で野鳥ということもあり、具体的にこの戦略でどのように対応していくということを書くというよりも、しっかりと郷公園とどのような方針を持って対応していくのか、ということを整理して、市民に周知していく。現在でも、テグスなど目立つようにしてくださいとか農家さんをお願いしている。

そういった部分の周知に努めるといった形で、こちらの戦略に入れていくとか検討していきたい。

傷病鳥への対応方針も今後は年によって変わっていくのかなというふうに感じている。方針について、市民の方に周知していく。例えそれが、自然の中でケガをしても、それは野鳥なので放っておくということであれば、そういったことも含めて周知していくことが大事だと思う。

→私としては、ぜひ保護していただきたいと思う。また傷病鳥だけでなく、他の生きものでも、この生きものはこう対応する、こういうことが発生した場合、守るということでもいいんじゃないかと思う。いかがでしょう。

⇒まずはどういう対応していくのが正しいのか、というのを整理したうえで、周知していく。これまで十分に出来ていないところでもあり、県とも確認していきたい。

→今の話し、かなり具体的な話なので、この戦略にそういう部分を含めるかどうか。例えば①の中に含まれていると言えば含まれる。非常に抽象的なので、そこをどう考えるか。そこを一度検討してみて、今の提案を含めるかどうか。あまり具体的に細かくやりすぎるとかえってそれに縛られてしまって柔軟なものにならないということがある。その辺をどういう書き方がいいか難しいところだとは思う。

→自治体と環境省ではだいぶ対応が違う。非常に難しいなと思う。ただ、今回生物多様性戦略を策定するのであれば、少なくとも豊岡市ではこうしますというのを示した方がいいと思う。コウノトリを人間生活の中で放すと決めたわけで、そうすると、当然軋轢が生まれる。その時どうするのかというのはやはり豊岡市としてはこういうスタンスですということは明記してもいいのではないかと。やはりそうしないと野鳥だから、野の生きものだから放っておくのか、それとも人間が関わってその後対応するのか、どうしても分かれてしまう、迷うと思う。それに対して、豊岡市としてはこうするんだと明確に示しても、いいのではないかと。

各自治体で違ってもそれはいいと思うので、少なくとも豊岡市については、

豊岡市の方針を示してほしい。

→傷病をはじめとするものに対して、人間は手を加えませんというのか、人間の手で放したものは人間の手で管理していく。大きく二つの方向性かと思うが、どっちでいくのかははっきり示したほうがいい。

⇒放鳥以来、豊岡市としては郷公園もあるということもあり、傷病鳥の対応については、豊岡市がどうこうするというよりも、結局は郷公園に対応をお願いするしかないのが現実で、方針を出すのは厳しいかなと思う。郷公園と相談させていただきながら、検討していきたい。

→確かに、市はお願いは出来ても具体的な対応が何かできるかということ、他の機関と連携しながらでないといけないので、あまり無責任なことも出来ない。

郷公園とか環境省とか、そういうところと話もして、何らか示してほしい。

《旧目標 3》

→春の小川について、まるまる削除するのではなく、「モデル的に春の小川づくりに取り組む地域を募り、実践します。」とても大事なことで、小さな自然再生にこれからどんどん取り組んでいかないといけないと思う。確かに「河川の改変は河川管理者との調整が難しい」というのはその通りですが、河川の改変とかじゃなくて、川の場合の小さな自然再生はほんとに市民による工夫、ちょっとした遊びの中の工夫みたいなところで取組めることです。だからこの目標 3 をまるまる無くすのではなくて、ビオトープ作りと川の小さな自然再生を盛り込んだ項目に何か変えていけないかなと思う。

もし、目標 3 がなくなってしまうと、具体的な取り組みの中に水辺に関するものがなくなってしまわないかと思う。

アユの産卵場の造成実験とかもされているが、それが川の事を放ってしまうと、上流部の川のことを言っているのだが、何のためにやっているのかということになる。川のことは大事かと思う。

春の小川っていう書き方が多分悪いのであって、もうちょっと違う、小さな自然再生という言葉を入れたらどうかなと思う。

⇒ビオトープを拡大することは難しく、次の作戦 3 の第一次産業の中での括りではありますが、作戦 3-1-③に、ご指摘のような取組みが水辺でも進んでいけばなあと思う。

もう少しそこに、小さな自然再生という文言を入れ込めないかについては、検討させていただきたいと思う。

→作戦 3、第一次産業の基盤、川は基盤であるという理屈は成り立っているが、そのこと、小さな自然再生事業を結び付けるのはイメージがつながりにくい。作戦 2 の中で、どこかに入れられるように検討して欲しい。

《目標 5》

→30by30 に触れるとしたら、目標 1 のところよりは目標 4 のところかと思う。30by30 は保護が図られている区域のことを言っている。まさに区域のことを言っているので、触れるとしたら、ここではないか。

目標 4 の②、ラムサールや OECM の拡大に努めるとなっている。それだと国立公園、国定公園、鳥獣保護区といったところが含まれていないことになる。

ラムサール条約登録エリア、OECM に限らず、その他の生物多様性の保全が図られている区域も含まれることが分かるように書き方をもう少し変えたほうが良いと思う。

②は変更理由のところラムサールに限らず OECM を含む自然共生サイトも視野にと書いてあり、反映しようと思うと、②はラムサールとか固有名詞を出さずに、生物多様性の保全が図られている区域の登録拡大に努めます、その位でもいいと思う。

もう一つ、OECM とかあまりなじみのない用語を出さない方がいい。それでいいと思う。

《目標 6》

→旧目標 7 の③が、作戦 3-1-1 へ移動して、「農林水産業に悪影響を及ぼす有害鳥獣」に変わっている。広く生態系に悪影響を及ぼすというのと、農林水産業にとは一致するのかもしれないが、旧目標 7 の「有害鳥獣によって希少になった生きもの」とは、文脈が違ふと思う。目標 6 にも有害鳥獣を盛り込んではどうかと思うがどうか。

⇒④の希少動植物の保全という話で、ノアの方舟で守っているところではある。

その中で他の計画なら再掲という形で重複掲載するが、本戦略では他に再掲がないこともあり、移動してしまっている。再度検討したい。

→個別の保護対策を進められていますというタイトルだが、これまで行政に関わってきたが、個別にやっても守れない。生きものは繋がりの中で生きているものであり、個々の希少種だけ守っていく。それでは守れないことがよくある。本当はもっと包括的なものが必要。有害鳥獣の駆除もしないと植物は守れないし、個々のやつを分けてしまうと上手くいかないことが良くある。従って個別にではなく、目標設定しづらいので個別にしたと分かるが、包括的にというのが本当はふさわしいかなと思う。

特に第 2 期まで個別でやってきたのであれば、第 3 期を包括的にして欲しい。

⇒ご指摘いただきましたことについては、それに伴って、中身も変わってくる可能性もある。何か一つ対策をしても、他の対策が漏れていけば対応できないことはあり、重要なご指摘だと認識はしている。

《数値目標設定について》

→30by30 のことが一つあった。それを入れたらどうか。

ラムサール登録エリア、学校とかで理解を深めるとかは、ちょっとあいまいな感じで、たとえば 5 年間で何件くらい、というようなものも入れたらいいのではないかな。年間 10 件で、5 年で 50 件。

どれがいいかは学校と行政と専門家と共同になるが、そういうところも若干、数値目標も立てやすいことであり、いろいろと効果も見込まれるので、数値目標もいれ

られるところではないか。

【作戦3について】

《目標1-①》

→ムラサキウニが農林水産業に悪影響を及ぼしている事例が豊岡ではどう確認されているのか。

⇒④ムラサキウニについて、具体的に承知しているというよりは、豊岡市の海においても、磯やけが非常に問題になっている。その磯やけの主要な要因がムラサキウニということで短絡的に紐づけたというところ。「ムラサキウニ＝但馬の磯焼け」と認識できるものを持っているということではないということ、少し確認させて欲しい。

→ムラサキウニの件分かりました。竹野でも海藻が減っているんじゃないか、ムラサキウニのせいではないかという声があって、気にしている。そもそも藻場がどのくらい減ったのか、減っているとしてムラサキウニのせいなのか、その他アイゴとか魚類も一枚かんでいる可能性があったり、海水温上昇とか栄養塩が不足しているとかそういった原因もあるのではないかと、ちょうど考えていたところである。ムラサキウニについて知見があるなら、違う場でも良いので情報共有していただけたらと思う。

→ムラサキウニに関して、確実に数が増えているのは間違いないと思っていと思う。但馬の海の話ではないが、長崎の方のダイビングショップ関係者が、そういうのが気になって、ムラサキウニをここ数年、個人的に駆除し続けて、YouTubeとかで一時期話題になっていたが、その結果、実際に魚類がかなり増えた。それは映像としても残っているので、ムラサキウニを減らすというのは効果があるのかもしれない。しかし、現時点で果たしてそのムラサキウニの影響が大きいかどうかというのは、但馬の海でははっきりしないのかと思う。

それ以外に、今までいなかったウニ、南方系のウニ、カンガゼというウニだが、とげの長いウニが10年くらい前は秋に小さいのがあるくらいだったが、越冬して、おそらく繁殖もしていると考えられる。もちろんウニなので、海藻とかも食べるし、そういった影響も考えられるので、ムラサキウニだけに限らず、いろんな生きものの可能性も考えていくべきかと思う。

→ムラサキウニのことは大事なことで、戦略に書いて何も原因はないということであると問題になるので、よく確認して欲しいと思う。

《目標1-④》

→これは③のほうでも同じ意見が前に出ていたと思うが、作戦3に位置づけるのが適切なかどうか。④は一次産業にだけ通じる話ではなくて、どちらかというところ、作戦1まずは知る、そっちに位置づけるほうが適切ではないか。

⇒どこに入れるのか非常に悩んで入れさせていただいて、「まずは知る」ということで提案もいただきましたので、それも含めて、再度検討していきたいと思う。

《目標 2》

→目標から「農薬や化学肥料に頼らない農業が増え」というのがなくなっている。生態系を豊かにするために有機農業を推進だったりとか、農薬を減農薬にして農業をやっていくというのを農林水産課の方が有機農業の推進に取り組みられていると認知している。目標のタイトルに入れなくても、小項目にでも入れておいた方が、有機農業に取り組まれている方の励みになると思う。

⇒一応分かりにくいかもしれないが、環境創造型農業という文言に、その意味合いが入っている。ただ、ご指摘のようにそのようにぱっと見て、頑張っていることが伝わりにくいところがあるかもしれない。どういう表現がいいかという部分も相談しながら、今言われたご意見も参考にしながら、分かりやすい形に変更を検討したい。

→数値目標の関係で、環境創造型農業の推進について、県の方でも推進していて、農業ビジョンに基づいて面積目標等掲げられているので、その数字などを参考にすれば立てやすいのではないかと思う。

→確かに農薬とか化学肥料、オーガニックとか見当たらない。

全体を見れば、豊岡型環境創造型農業が盛り込まれているのは分かるがメッセージ性が弱いというご意見だと思う。次までに検討していただければ。

⇒国であったり、県が立てられる数値目標の実現には、基礎自治体の豊岡市の数字の積み上げが必要かと思う。

その中で、特に有機の部分とか農業の関係、豊岡市は頑張っているので、数値目標については次回にご提案させていただきます。

⇒農業ビジョンを立てた時に具体的な数字を落とし込んでいないところがない部分もあるが、他の地方創生の総合戦略の方や、他の市の計画の中で掲げている数値目標というのもあり、一度整理、確認をしながら、他との連携も図っていききたいと思う。

→環境創造型農業が減少傾向ということもあるが、厳しい状況の中で、目標を設定して、みんなで頑張ってその目標を達成しようということも必要かと思う。検討した上で、生物多様性の地域戦略でどんな数値目標がいいのか次回案を出していただいて、皆さんと意見を交わして検討していきたいと思う。

《目標 4-②》

→地元産の学校給食というところに関して、現在はコウノトリ育むお米の減農薬が使われているが、来年の1月から1か月間無農薬米を試験的に導入するとか、オーガニック化についても少しずつ動きがある。戦略に、有機農産物だったりだとか、無農薬米ということは書いてないので、オーガニック給食の推進に関しても少しでも盛り込むと、取組まれている農家の皆さんを応援する形になるし、現在取り組んでいる方も、有機が生態系のことにつながることを考えることにもつながると思う。

→学校給食でも、確かに地元産と書いているが、オーガニック的な要素とかそういうよ

うなことをどう入れ込んでいくのか。その辺も具体的に何かできるのか。

⇒学校給食というシステム、予算があつての話であり、いろんな課題感がある。ただ、現に入れていただいている事例もあるので、ボリューム感だとか季節的なことであるとか、いろんな要素を検討しなければいけない。

市の方としては、先ほどから言っていたように、減農薬米を無農薬米に全量していきたいという流れも踏まえて、野菜についてもオーガニックの割合を増やしていけるように努力をしていきたい。

ただ課題感は大きいと思っていますので、その辺をどうクリアしていくかも合わせて検討していきたい。

その中で、何か数値の設定等できるようであれば、その点につきましても検討させていただきたい。

→次回に、現状の数値を出していただき、その上で5年間にどれだけ伸ばせるのか具体的な議論をしていきたい。現在、学校給食で地元産野菜を取り入れているのか、その量に対して、オーガニックをどれだけ使っているのか、そういった数字を示してほしい。

《目標7》

→目標7の部分がどうしても農業のことが中心になっていて、漁業者の若手を担う施策に関しては若手就職希望者に第一産業をPRしますということぐらいしかないのかなと思う。

漁港に元気な声が響き渡るためには、漁業者の若い世代の育成も必要になってくる。その辺で何か出来ることはないかと考えていただけたらと思う。

→どうしても豊岡の計画の場合、コウノトリというものが中心になることもありこれまでの戦略は農業中心であった。今回、漁業、林業とか広がりをもって包括的に考えようという方向にはなっている。

⇒課題があると指摘いただいたことは、正にそうかなと思う。

②では第一次産業の魅力を若い方に知っていただくこと、④では農地や森林所有者とのマッチングとなっている。漁業従事者についても何が戦略にできるのか、検討したい。

⇒今、指摘のあった林業や水産業については、なかなか取り組みが進められていないということがある。

林業ビジョンについては、現在策定をほぼ終えようとしている。その中でもやはり林業関係者を増やしていく、というようところが喫緊の課題だということで、まず手を入れるべきだという認識になっている。少しでも若い人が入ってくれるような手立てを目に見える形で進めていきたいと思う。

漁業の方についても、同じような課題がある。今インドネシアの実習生の活躍によって支えられている部分はかなり大きくなっている。

漁業分野に日本人がなかなか来ていただけないという現状もあり、一朝一夕には進まない。地域おこし協力隊という制度で人を集めるということも一つの案ではあ

るが、船というかなり高価なものを必要とする話しになるので、漁業にすぐ取り入れるというのは難しい面もある。そういうふうな特性もふまえて、どうやって新しい人にそこに入れていただけるのか、引き続き検討していきたい。具体的にはここには書けないが、そういうことは考えているということでご理解いただきたい。

→なかなか難しい課題だが、重要な指摘なので、どのように形で、漁業の担い手の確保について計画に入れ込むことができるか考えていく。

あと、ここではないのかもしれないが、ダイビングのように海に関わっている職種について、第一次産業ではなく観光産業になるが、そういった人たちの関係で何か生物多様性地域戦略の中に入れられないかと、気になっている。

→生物多様性というか、今メインのフィールドが竹野の海であるが、竹野の海は今のところ海藻とかがまだまだ豊富な海というのが、日本全国で潜っておられる水中写真家の方の認識で、海藻がまだまだ元気な海だからこれは大事にしていけないと、と良く話されている。それをどう維持していくかというのが今後の課題だと思う。

魚類に関しても、増えたり減ったり、水温の変化や環境の変化もあり、前いたものがいなくなったり、前までいなかったものがやってきたり、ということがどんどん増えてきた。それがいいのか悪いのか分からないが、間違いなく海の環境は変わっていると思う。どこの海においてもダイビングなどの業種の人達が藻場の再生だったりとか、漁礁を作ってみたりだとか、環境の保全に関しては維持、再生しようと努力をしている。竹野でも、そういうことが出来ればなど常々思っている。漁業者の人ももちろん漁獲が減ったり、魚の値段が下がったり、いろんな苦勞をされていることから、その辺も協力しあって出来ることが必ずあると思う。そういうことに漁業者の方と一緒に取り組めていけたらいいなと思っている。

→作戦3ではずれている気はして、次の作戦4にどちらかという、含まれると思うが、日々海の中を見ている方たちの知識や研究を生物多様性の保全に向けて、どういった人たちと一緒に取組んでいけるのかということで意見をいただいた。

⇒今回、生物多様性地域戦略を策定するにあたり、前回少し弱かった海や山の関係者に入っただき参加いただいている。なかなか海というのは全国繋がっているため、竹野だけきれいにしてもどうこうできるものではなく、この戦略策定にあたり難しいところ。その中で、大事な視点だということは分かるので、考えていく必要があるなという認識はあるが、反映するのも難しいということもご理解いただきたいと思う。

→本当に実現できるかどうか具体的な案の一つとして、近くに兵庫県唯一の水産高校、香住高校もあるし、舞鶴にも京都府の水産関係の高校がある。そういうところと何か連携をすることによって、豊岡の漁業に寄与できることがあるのではないかと思う。

→漁業者が元気になって、次の担い手が生まれるような、人材育成の仕組みという中々そこまでは難しいが、提案のような交流を通して、漁業に対す

るポジティブなものを生み出す。それをどっかで入れ込めないか検討いただきたい。

【作戦4について】

《目標5》

- 前回から大分文言変わっていますよね。「コウノトリ野生復帰の取組みを知った…」、コウノトリ野生復帰に、そこに焦点を当てているがこれはどういう考えか。
- ⇒前回も中身を見ていただいたら、コウノトリ野生復帰というのがそれぞれ戦略についている。とりたてて方向性が変わったということではない。他の地域と違って、豊岡の持つ一つのポテンシャルというか、そういった部分を少し強調したということ。
- コウノトリ野生復帰だけに焦点を当てるよりも、それこそ海の生物多様性の話も出ていたので、ダイビングだったりシュノーケルであったりというのも豊岡の魅力のあるコンテンツの一つとして、そのような書き方に出来た方がいいと思う。
コウノトリ野生復帰の取組みを知ったと具体的に書いてしまうより、豊岡で生物多様性の豊かさを知ったと、そういう幅を持たせた書き方で。
- どちらにしても、コウノトリが軸になる。そこから、たとえば森里川海の視点でそこにコウノトリがある。コウノトリがいるのは森里川海のつながりの中にあるんだ。そういうような視点からコウノトリを一つの切口にする。
豊岡の海とか川とか里の生物多様性の観光コンテンツのキーであるという、そういう書き方になったほうがいろんな人がいろんな形で関われる。
コウノトリが主役ではあり、重要なものではあるが。
- 確かにコウノトリがピックアップされているとは感じる。世界中から訪れる人に加えて、発信の方に重きが置かれているのかと読み取れる感じがする。人材育成とかに加えて、そういったことが書き込まれているのかと思う。
コウノトリに拘る必要はないと思う。④飛来地との関わりの変更理由にもあるように、新しい飛来地の方が受け入れるために、視察に來たり、実際に保全活動に取り組んでいる方と交流したいという話しはあり、項目としては一つコウノトリを残しても良いとは思っている。全体としては、皆さんの意見に賛同する。
- コウノトリに関わっているので嬉しいが、狭まる可能性はある。下の項目にコウノトリ野生復帰ともあり、上の目標に載ってきたのかと思うが、コウノトリ野生復帰にだけ限定しなくてもよいのでは
- コウノトリでも良いと思っている。短期戦略は5年限定です。5年後には変えられる。逆に危惧しているのは、コウノトリは終わっているのでは。という人が増えている。子どものころから、大空を飛んでいる姿を見ている人も二十歳になるし、田んぼもたくさん作られている。逆に、ここ5年だけは、再度こだわって、次外すのも良いのではないかと思う。
- ⇒コウノトリ野生復帰を始め、とただけでなく、その他にもたくさんオーガ

ニックなど自然再生の取組みは様々な視点が着目されてきているので、なくても良いのではないかと思う。具体の取組みでも、①～⑤でも、コウノトリ野生復帰のことばかりであり、広く目標5を表現するのであれば、一つ目の取組みについて「野生復帰をはじめとした支援体制の取組み～」という表現で広げてはどうかと感じた。

ただ、今の話にあったように、5年の限定という話し。確かに、もうコウノトリはたくさん飛んでいるしいいのではないのか。という雰囲気は感じている。それを載せるなら、作戦1の「知る」あたりとか「伝える」で、何かフォローできないか。目標4はキラーコンテンツとして活用して、別のキラーコンテンツを生み出そうというイメージを持っている。他のところで、野生復帰の取組みはゴールを迎えていないということを伝えてはどうかと思う。

→先ほどの話、確かにそうだなと聞いていた。もう終わったのではという中で、もう一度、軸に据える必要はある。ただ、コウノトリの目標になっている5つの項目にコウノトリとあり、言い過ぎ感もあるので、「豊岡の取組を始めとした…」という感じで、そこを軸に海や山、川という感じで修正しては。ぶれて申し訳ないが。

→コウノトリに関わっているので、コウノトリ色が強くなると申し訳ない気持ちもあったが、コウノトリと生物多様性を目標として分けるというのはどうか。野生復帰の目標を一つと、生物多様性の目標で、世界、日本との交流にするような目標に分けるというのはどうか。

→コウノトリ野生復帰の取組みに参加の場面と、観光のようなものをもう一つ。豊岡の野生復帰は有名であるし、最大の地域の資源である。それをどうこの中に入れるのか。今のご提案もいい気がする。目標が多くなるが。生物多様性の交流と、野生復帰に分ける。

すぐには難しいが、どのような組み合わせができるか考えて欲しい。

《目標5-②》

→前回観光の話が結構出ていた感じがした。観光は生物多様性に関連するような観光、というような議論をした記憶があるが、それは目標5のあたりにねじ込んだという理解でいいのか。

⇒前回海外のインバウンドということで議論をした。ぜひ民間事業者の方々の知恵を借りていったらどうかなと言われていた。文言的に変わってはいないが、そこに込められている

《目標6》

→先ほどあった、個別でなくて包括的に取り組まないといけないという観点からすると、森と川と海はつながっているというのは、今では当たり前の考えになっている。逆に漁業を考える場合も漁業だけでなく、山とか里とか川とかそういうようなつながりを持って行こうという、その中で特に漁業に焦点を当てていくようなものが、何か一つあればと考える。

【作戦5について】

《目標1》

→ここが提言ができるかどうか分からないが、コウノトリ共生課、年々人が減っている。こんなことが本当に出来るのかとは思いますが、ここに、生物多様性調整係を設置します。位書かないと。その係で、ビオトープの管理や、環境教育など生きもの調査などが出来る、そういったしっかりとしたシステムを構築しないと。豊岡は環境を大事にしていることをアピール出来るようにしないと。

→行政組織がこれを推進するための覚悟があるかどうか。前回から、誰がするのか明瞭でなかったことから進展しなかった反省が10年間あり、どういう推進体制を取るかという話しが前回あり、プラットフォームを作ってはどうかという話をした。それよりも踏み込んで、行政の中に、そういった調整的なことができる人やものを作ったり、人材を雇用してはという提言であった。

⇒庁内の組織を充実させるのは現実的に難しい。このセクションに限らず、庁内全てにおいて。推進体制の強化の方法をどうするかを工夫する必要がある。組織を一つ増やすのではなく庁内のセクションから募って、市の組織の協力を得て、NPOなど別の推進体制を作ったり、外の組織ともネットワークを構築する。残念ながら、今は言えないが、大きな組織改編が予定されており、組織の拡大とは違う方向となると思うので、違う形でのシステム構築で考えていきたい。

→そのとおりかと思う。仕組みとしては、地域おこし協力隊を雇用し、3年間で、食べていける環境系の組織を作っていくのかと。

→外部人材とか、若い専門性のある人を活用する。行政組織の中では難しい課題であり、戦略の実効性をどう担保するかは考えなくてはいけないので、考えるにあたり、行政だけで難しいのであれば、行政が調整的な機能を果たすとか、地域おこし協力隊の力を借りて、3年間で自立できるような見通しを立てる。単なる作文でないようにしていける体制を作っていただきたい。

《目標2-①》

→実際出来ているかどうか確認する機関。推進委員会なのかもしれないが、明記しては。機会とあいまいに書かずに。

⇒今後反映できるように、内部協議を進めたい。

《目標2-②》

⇒京阪神の大学生などを招いて地域で交流されているが、苦労や継続していくにあたっての悩みや課題などを聞かせて欲しい。

→2つの大学の学生を誘致した。人とのつながりがきっかけで実現した。今の繋がりから広げて、他の大学や教育機関にどうアピールしていくのか、どう誘致するのか、模索する必要がある。どうやって広げていくのか難しい。

【閉会】 出口副委員長よりあいさつ